

エドマンド・スペンサーの詩にあらわれた 愛の概念、その内容と解釈

松 山 正 男

一 女性尊重と宮廷風恋愛

五 二つの立場——グリアスンとルイス

二 愛の概念について

六 スペンサーと「アレゴリー」

三 スペンサーと「アモール」

七 結論——エロスからアガペーへの志向

四 スペンサーの多面性

一 女性尊重と宮廷風恋愛

古代の風習と現代のそれとを比較する時、われわれが古代人より優れていると自負していることの一つに女性尊重がある。われわれは、女性に対し、女性であるがゆえに、いわば追従をしたり、うやうやしく尊敬しているのである——チャールズ・ラム「エリヤ随筆集」より

欧米の風習と接触することの少なかつたわれわれ日本人にとり、敗戦後アメリカの進駐と共に、教えられた一つの教訓、乃至風習は、女性尊重ということであろう。男性中心で横暴だった日本人の目には、たとえば道路を横切る時、電車に乗る時、エレベーターに乗る時、戸口から出る時、ことごとくに女性優先 *Lady first* ということを尊重し、実行する外人の姿に、びっくりし、ほゝえましく感じ、あるいは自らかえりみてはすかしく思った。そして

年と共に、若い世代の人々はそれを自分達の習慣に同化しつつある、というのが今の日本に現われた一つの著しい変化であるといえる。

ところで、この女性尊重、ひいては女性崇拜という風習は、昔から西欧に存在していたものであろうか。歴史の比較的浅いアメリカでは、建国当時、女性の数が少なかったのといわば稀少価値のゆえに特に女性が尊重されたのであると云われている。ではヨーロッパではどうか。社会史をしらべてみると、実は十世紀までは、このような女性尊重という、みやびやかな風習は全然なかったこと、さらに、十一世紀になって始めてそれが出現したことを発見する。十一世紀といえば日本では、平安朝末期に当る時期である。ところが、この女性尊重が、中世の宮廷を背景にし、いわゆる「宮廷風恋愛」Courtly Love として出現したのであるが、それが一度成立するや、いかにそれが熱狂的に支持され、拡大していったかは、多少変形はしても、今日の社会にまで一つの風習として残っている事実を見れば明瞭に理解できる。要するに、少くとも形式的な面で、女性を尊重する習慣は、日本にもなかったように、十一世紀以前のヨーロッパ、すなわち、ギリシャにも、原始キリスト教時代にも、ベイオウルフの世界にも、全くなかったと云えるのである。

この女性尊重は、フランスのトルバドールからおこった。そして、女性を崇拜し、女性に対し、献身的な形をとるようになるや一種の宗教のようなものに発展していった。これは「恋愛宗教」Religion of Love と呼ばれる。そして、具体的には、宮廷風恋愛という形式であらわれたのである。今その特色をチョーサーの言葉を借りて、しらべてみよう。

In whom that alle vertu list habounde,
As alle trouth and alle gentlesse,

Wisdom, honour, freedom, and, worthiness, (Troilus II-159-161)

ここに述べられているのは騎士 Knight の特色である。まず、騎士たる者は、その恋人 Lady を裏切らない「まこと」truth を重んずる心の持主であらねばならない。また、その恋人の「微妙な」subtle 心をよく理解する「知性」wisdom を持たねばならず、さらにその上、「高貴」noble で、「やさしい」gentle 心でなければならぬというのである。これはまさに C・S・ルイス Lewis の指摘している「謙譲」Humility と「礼節」courtesy という宮廷人たる者の二つの属性と一致している。しかし、その特性はこれのみではない。ルイスは、今一つ「姦淫」Adultery という要素を挙げている。これは少し説明を要すると思う。

そもそも女性尊重という風潮は「宮廷風恋愛」という形をとって発生して来たのであるが、やはりそれには原因があった。その中でも最も大きな原因は、アメリカ合衆国の場合と同じように、中世の城中には兵士である男性が多数いたのであるが、その数に比較して、女性がほんとに少数だったという事実、云いかえれば、女性の稀少価値にあったのである。そこに於いては、当然、結婚と恋愛とは別のものであった。結婚ということは、地位や財産という家柄の問題であり、家柄の異った者同志の結婚はありえなかった。逆に、結婚は、愛情とは無縁のものであったと云える。他方、恋愛、それも宮廷風恋愛というものは、恋愛の対照である女性が、人妻であらうと、高貴あるいは卑賤の者であらうと、問題ではなく、一番主要なことは、愛情と奉仕にあった。かくして、それは「姦淫」という結果を必然的に招いたのである。

ところで、この中世風な騎士道的精神の特色の中、始めの二つ、すなわち「謙譲」と「礼節」は、道徳的に申し分がないし、キリスト教的なものと一致するが、この第三の特色において、実はこの「愛」は形而下的なものであることが明瞭にわかる。そこで、この騎士道的世界とその愛情を描いたスペンサーの詩を理解するために、われわれ

は、スペンサーにおける「愛」の概念を追求して行く必要がある。それを明らかにすることによって、スペンサーに代表されるルネッサンス時代の思潮を知る鍵となり、さらにその思潮の歴史的役割と、現代的意義を解明できるのではなからうか。

二 愛の概念

ギリシヤ語で、「愛」を示す文字に四種の区別がある。

- (1) エロース *eros* は、男女の性的な愛を指す。
- (2) ストルゲー *storge* は、肉親の愛、すなわち本能的な情愛である。
- (3) フィリア *philia* は、社会的な愛で、これは友愛とでもいうべきものである。
- (4) アガペー *agape* は、宗教的な愛、すなわち神に向っての人の愛と、人に向っての神の愛と、神との契約の意識における人間相互の愛（レビ記一九章一八節参照）を指す。

この四つの種類で、愛の概念は成立していると云えるのではなからうか。云いかえれば、人間においては、この四つが色々組み合さり、あるいはその中の一つ乃至複数のもののみが表面に出ていると云ってよいと思う。

ところで新約聖書には、第一と第二の言葉がでていない。そしてその二つは第三のフィリアの中に集約され、いわば、人間の人間に対する愛、地上的人間的愛情を表現しているといえる。しかし、キリスト教に於いて特に注意すべきものは、まさにアガペーという第四の愛にある。これはキリスト教に独特のものであり、ヘブライズムをヘレニズムと区別する道標とでもいうべきものである。

アンデルス・ニグレン *Anders Nygren* は、原始キリスト教以来、現代に到るまでの教会史を、アガペーとエ

ロースの相剋と調和の歴史として把握している。その場合、彼の云うエロースは、前に定義した性愛という狭義ではない。それは、ヘレニズム文明を代表する言葉である。すなわち、ヘレニズムの世界観では、存在者は「形相」formを憧れる、そしてこの「形相」への愛をエロースと名付けたのである。この思想を代表するのはプラトンの哲学であり、エロースとは、超越的存在と実存的人間を結びつける原動力であり、これを媒介として、「形相」が具象の中に体现されると考えるのである。それゆえ、ヘレニズム的なエロースは、第一と第二と第三の種類の愛にさらに哲学的、抽象的な色彩を加え、高次なものとなしているといえる。しかしこのエロースに対して、ヘブライックのアガペーは、あくまで人間的な愛とは異った次元に属する、天的な、絶対的な愛を意味することは云うまでもない。

キリスト教がローマ帝国の国教となるや、キリスト教というものがカトリック教会という世俗的形態をとって代表されるものとなり、それと共に、中世人は、世俗的人間的愛と神的絶対的愛との調和、ないし妥協を計った。かくして生れたのが、アウグスチヌスの云う「カリタス」caritasという愛の新種、というより雑種概念である。このカリタスという概念を作り出した背後には、一つの思想、いわばプロテスタントと明白にあいれないカトリック的思想が存在することを指摘せねばならない。すなわち、それは、人間というものは、巡礼を行い、色々努力することにより、多くの誘惑を乗り越えて、遂に神の愛に、自分の力で到達できる、という思想がそれである。この思想はパウロの主張する罪や恩寵という考え方を、無視とはいえないまでも、少くとも軽視した態度から発生したものである。

ところで、このカリタスという概念は、中世における人々の発想や、思考の論理を全面的に支配している事実をはっきり認識しておく必要がある。またそれは今日のカトリックの人間観にも実際にあらわれていることを思いあ

わすべきである。とにかく、カリタスはエロースとアガペーの調和、ないし混同した概念であり、絶対者たる神への愛が感覚的な愛と結びついているのである。神への愛も、人への愛も、美への讃歌も、真への憧憬も、それらすべては、人間という霊と肉が密接に結びついた存在にあっては、一つの人間の体験という坩堝の中で、混合し、共存し、相い補ってしまったのである。これは特に、中世の神秘思想家に典型的に見られる現象であることは、ニグレンの指摘をまつまでもない。こゝにおいて中世人は、福音や恩寵を否定することなく、しかも同時に人間完成の道程とその可能性を信じたと云つてよい。

さらにこのカリタスは、十一世紀の宮廷的恋愛へと受けつがれ、こゝにアモール *amor* という新しい愛の概念の発生に影響を与える。このアモールは、その基調に第一の種類の、性愛的エロースの色彩が強いが、しかしそれは、形而下的な人間的愛であるフィリアとエロースの奇妙な結合物である。しかも、それは肉体の裏付けのないエロースとでもいうべきものである。その理由は、このアモールは宗教的偽装をまとうている、それゆえに、多分に観念的色彩を持ち、時には形而上的な属性をも有している。それは単なる人間的な愛、ストルゲーやフィリアやエロースではなく、ヘブライックのアガペーと、その変種であるカリタスの影響を受けたプラトニックのエロースなのである。そして、特にチャオサーの場合にはつきりと見られるように「(恋)愛の神」*God of Love* ないし、「(恋)愛の宗教」*Religion of Love* というものとして結実した。すなわち、あくまでも、地上的人間の中に、神的な、超人的なものを感じとり、それを崇拜する。愛はヴィーナスとなり、キュービッドとなり、しかも同時に、一つのイデア *idea* であり、また神 *god* にもつながるものとなっている。あたかもそれは、愛の神が、神話的動物や具体的女性に化身して出現したり、また人間が形相を憧れ、愛と美の使徒として巡礼の旅をして、ついに自分自身も聖者や神そのものになれるかのような気持になったといえる。これはヘブライックなアガペーという概念——イスラエ

ル民族が強硬にその純粋性と独立性を主張してきた概念と比較すると、明らかにアモールなるものは、異教的なものに属するといえる。そしてこのアモールが、ロマン・ド・ラ・ローズに始まる宮廷風恋愛文学の中心思想をなして行く。十一世紀にヨーロッパ、特にフランスに発生するや、爆発的な勢いで全文明国に伝染し、中世文学の主流をなし、やがてルネッサンスに受け継がれて行くのである。

三 スペンサーと「アモール」

近代英文学がチャウサー(1340-1400)から始まったことは今更云うまでもない。ところでそのチャウサーを特色づけるものは、何よりもまず彼が「愛の詩人」Poet of Loveであったことにある。

すなわち「バラ物語」The Romaunt of the Rose (1368) という翻訳ものから始まり「公爵夫人の書」The Book of Duchess (1369)「薔の宮」The House of Fame (1384)、「百鳥の集」The Parlement of Foules (1382)を経て「トロイルスとクリセイデ」Troilus and Criseyde (1385)そして「カンタベリー物語」Canterbury Tales (1387-1400)に到る作品は、いわば愛の追求であり、讚美であるとみることができる。ところで、これらの作品には「(恋)愛宗教」的色彩が濃厚であり、事実、「(恋)愛の神」に対する呼びかけや言及がいたるところで見られるが、「トロイルスとクリセイデ」の悲恋物語にそれが著しく目立っている。それゆえ、この作品の最後に、十字架の愛に呼びかける言葉がついているが、それがあまりにも、木に竹をついだような感を呈していることを否定できない。

ところでこの愛の詩人チャウサーをスペンサーは、どう見ていたろうか。今、フェアリー・クイーンの一節を用しよう。

Old Dan Geffrey (in whose gentle spright
The pure well head of Poesie did dwell)

先師ジェフリ、そのけだかい魂に
純粹な詩の源泉が、やどつていた

(VII, vii, ix)

右の詩句からも明らかのように、スペンサーにとつて、チャソーサーは師匠であり、用語も、韻律も、音調も、そして「愛」の概念もすべてチャソーサーから学んだのである。

そこで、スペンサーの作品に目を転じ、「牧人の暦」*Shepherd's Calendar* (1579) から始まり、「恋愛小曲集」*Amoretti* (1595)、「結婚歌曲」*Epithalamion* (1595) や「四つの讃歌」*Four Hymnes* (1596) を経て、「神仙女王」*Faerie Queene* (1589-1596) に到る系譜をたどる時、そこに一貫して、追求され、展開しているのは、やはり、愛の宗教であり、いわば愛の諸相とその讃歌であると云える。

事実、一五九六年の「四つの讃歌」の第一歌は「愛の讃歌」*An Hymn in Honour of Love* という題がつけられている。しかもその讃歌の根底に存在する思想は、プラトニズムであることに間違いはない。たとえば、

For love is Lord of truth and foialtie,

愛は真と誠の主人であり、それは

Lifting himself out of the lowly dust,

黄金の翼をはばたかせ、いやしい地を去り、

On golden plumes up to the purest skie,

いまわしい肉欲の手のとどかない

Above the reach of loathly sinful lust,

清くけがれない大空にあまがける。

(II 176-9)

この愛は、一時的な衝動にすぎないあの肉欲とは次元の違った、高貴で純粹な情熱である。そしてその愛は、天上の生れである「美」に対する憧れの別名である。この憧れは、愛の神の矢によって、人間の魂にかき起される、い

わばキュービットでもある。そしてそれは、天上の光として、人間の心身の中に「美しい燈」*fair lampe* として輝く。その典型的化身はヴィーナスである。彼女は、神の備えた「不思議な原型」*wondrous Pattern* が具象化されたもので、いわば「完全な美」*perfect Beautie* そのものなのである。女性に「あの美しい燈」が宿る時、その肉体も、天上の光の住居にふさわしいように美しくなる。女性のみならず、地上の一切の美は、この天上の美をわかし与えられているから美しいのである。そして、その根源が天上の美であるがゆえに、本来、善なるものである、と考える。

For all that faire is, is by nature good;

全て美しいものは性来、善である。

That is a signe to know the gentle blood.

それによって美のけだかい生れがわかる。

(*An Hymne in Honoure of Beautie, II 139-40*)

右の詩に、スペンサーの別の一面、すなわちモラリストの面があらわれていることに注意すべきであるが、これは後で述べるとして、要するにスペンサーは、何よりもまず芸術家であり、当代の詩歌の衰頹をなげき、先達のチヨースーに見習って、英詩を復興せんと努力し、韻律や詩語や比喩という形式的な面に力を尽すと共に、自から、「美の使徒」を以て任じ、中でも最高の美を女性の中に認めた、云いかえれば女性の中に天使を見たのである。この思想は、明らかにキリスト教的なものというよりはむしろプラトニズムやネオ・プラトニズムであるといえる。事実、当時の歐洲にはフィチーノ *Ficino* の主著「饗宴註解」が広く読まれていたのであり、このイタリヤの哲人の思想は、いわば「キリスト教的プラトニズム」*Christian Platonism* ともいうべきもので、ネオ・プラトニズムとキリスト教思想との混血児であり、プラトンの愛にキリスト教的愛の糖衣をまといわせ、恋愛の実践に新氣風を企てたものである。そしてスペンサーの学んだケンブリッジ大学が、当時の新思想であるプラトニズムの最も大

きな影響下にあつたこと、特に彼の親友「My singular good friend」であるハービー Harvey と共に「二人は一つの骨片を争う犬のように」ギリシャ・ラテンの古典、イタリヤの大作家を次々と読んだことを思いあわせるとスペンサーがこのフィチーノの響影を受けたことは明白である。

要するにスペンサーの詩にあらわれた愛は、プラトンの「エロース」とプライの「アガペー」との混血児である中世的「カリタス」を、宮廷風恋愛や騎士道的精神で昇華したローマン風の「アモール」であると結論してよからう。

四 スペンサーの多面性

先に引用した一節に「美は善」であるという句があつたが、この句の命題は、芸術家としてのスペンサーの別の一面、すなわちモラリストとしての面を強くあらわしていることはすでに述べた。この倫理的な面は、ローレイ Raleigh 宛の手紙（一五八九年一月三日）にある「フェアリー・クイーン」の目的にも明白に打ち出されている。それは「徳にあふれみやびやかな教訓により紳士、あるいは、気品のある人物を養ひ育てる」“to fashion a gentleman or noble person in vertus and gentle discipline”の目的であるという。事実、この大作の随所に、道德的説教がなされており、また全体の構成に、倫理的意図が存在することは今更指摘するまでもない。「フェアリー・クイーン」は、まさに紳士の理想を掲げた書物であり、そこに貫かれていた倫理は、キリスト教の影響を受けた「節制」「友情」「礼節」というアリストテレス的、プラトンの徳目にほかならない。プラトニズムで精神化された人間の愛「アモール」により、人間における天使的要素を、修養と訓練によって、ますますのぼし「完全な人間」を目指す理想主義である。こゝに於いて中世的「宮廷風恋愛」の特色たる「姦淫」Adultery は、紳士の徳「貞節」Chastity に置きかえられるにいたる。

とにかく、その理想主義的モラルの根底は、あくまでも人間的なものであつて、プラトンのアイデアや形相のごとき、抽象的、非肉体的な観念ではない。なぜなら、常にスペンサーが意図したのは、絶対美や最高善そのものではなく、その化身である具体的女性であり、神的観念的愛ではなく、肉体を持つ人間の愛であつたからだ。この点において、純粹なプラトニズムとも異なる。いわばヒューマニズム的色彩が濃いといえる。こゝにおいて、スペンサーは、モラリストでありヒューマニストであるといえる。

ところで、このヒューマニスティックな愛のみが、スペンサーの詩にあらわれた愛であろうか。先ず発見するのは若き日のキーツを喜ばせた感能的美の世界である。それは「フェアリー・クイーン」の第二巻の「至福の四阿」*'the Bower of Bliss'* (BK. II, xii) や、第三巻の「アドウニス園」*'the Garden of Adonis'* (BK. III, vi) を見れば明らかである。また、「ムヨポトモス」*Mniopotmos* では、胡蝶クラリオンが、花から花へと「飽くことを知らない欲望」*his unstaïd desire* に誘われて、豊饒な自然の中に感能を心ゆくまで満足させる姿が描かれている。

“What more felicity can fall to creature, 快楽を思うまゝに満足させることよりも

Than to enjoy delight with liberty?” 大きな幸福は被造物にはあり得ない。

快楽の満足を目的とした愛は、まさにルネッサンス的な、人間のあるいは動物的な愛であり、本能という自然的次元に属するものである。それを美的に、感能的に、時には忘想をも交えて描かれていることが解る。

さらにスペンサーの詩集を読み続けると、もっと別種の愛、すなわち、天上の愛たる「アガペー」もあらわれている事実を見逃せない。たとえば、「四つの讃歌」の第三歌「天上の愛の讃歌」では、プラトニズムも、ナチュラリズムもヒューマニズムも、「すべておろかなこと」*'all those follies'* として棄て去り、人はキリストへの止

みがたい愛を持つ時、地上の一切のものから解放され、真の喜びに満される。それゆゑ

“With all thy hart, with all thy soule and mind, 汝は汝の心を尽し、精神を尽して、キリストを

Thou must him loue, and his beauests embrace” 愛し、彼の命令に従うべきである。

(1126 D-261)

そうすれば、「汝の魂は、人智をはるかに越えた天上の思い heavenly thoughts に浸つて歡喜し」

“And thy bright eyes shall plainly see 汝の輝く眼は、汝の眼前に常にあるキリストの

Th’ Idee of his pure glorie, gresent still 清く、栄光の御姿をはっきり見るであらう

Before thy face, that all thy spirits shall fill そして汝の魂は、天上の愛にやさしく

With sweete enragement of celestiall love 包まれ、聖愛にみたされるであらう

……(11 283-286)

ここには完全に正統的な「アガペー」が美しい韻律に盛られて述べられている。そしてこれは突然、この詩に出現したのではない。ギリシャ・ローマの古典が栄えたあの同じケンブリッジ大学は、宗教面に於いても、宗教改革の結果として生れたプロテスタントの力強い流れが入り込んでいた。ニコラス・リドレイ Nicholas Ridley エドマンド・グリンデル Edmund Grindal, ジョン・ブラッドフォード John Bradford トマス・カートライト Thomas Cartwright などがその代表的闘志である。特に、カートライトは、教壇で過激なカルビニズムを説いたので学園から追放され、一大波乱をまきおこすという事件が、スペンサーの在学時代におこった。「牧人の暦」Shepherdes Calender の五月 May をみると、明らかにスペンサーは、友人のハーバーと共に、カートライトを強力に支持している。そして、折ある毎に、形式的儀式宗教と化した国教の偽善性や、不純な旧教の無智と無信仰に対

し、攻撃の筆をやすめていないことは、スペンサーの詩を読めば、誰でも気付く事実である。他方、国教や旧教への攻撃の反面として、スペンサーは実際の「アガペー」の化身たるキリストを愛した。そして無常な人生にあっていやという程不遇を味わったこの詩人は神の愛に救いと平安とよりどこを求めたことも確かである。

するとスペンサーの愛の観念には、四種の愛が、姿を変え、形を異にしつつも、すべてあらわれている訳である。モラリスト、ヒューマニスト、エビキュリアン、クリスチャンとしてのスペンサー、一体どれが彼の中心であるのか。これらの多面性は相互にどのような関係になっているのか。この問題に対する解答は非常に困難であり、すべてのスペンサー研究は、それぞれ、これに対する一つの解答、ないし解答への試論といってよからう。そこで、しばらく、主題の「愛」からはなれて、この問題について考えてみたい。

五 二つの立場——グリアスンとルイス

チャールサーやミルトンの場合にも云えることだが、特にスペンサーには、ギリシヤやローマの神話がキリスト教的世界に大手を振って登場し、二つが奇妙な組合せをなし、その上、中世的伝統や習慣を温存する一方、ルネッサンス的ヒューマニズムと、宗教改革的ビュリタニズムも混入し、複雑で、一見すると混沌とした世界が内蔵されている。一体この錯綜した多面性を統一するものはあるのか、それともそれは、あくまでも対立し矛盾したものが同時に存在していたのか。これに対する見方は、大別して二つに分けられると思う。

第一の立場はハーバート・グリアスンの見解であり、これらの複雑なものが、すべて中途半端で、対立し、相剋していると見ている。すなわち、スペンサーの中には、大別してルネッサンスと宗教改革の二つが鋭く対立していて、その両者は「調和もせず、深い影響も与えていない。……彼の詩の思想も、気分も、われわれがマローやチ

ャップマンに見る文芸復興のそれにも、ミルトンの中にひびく清教徒的宗教改革のそれにもなりきっていない」
 (“Cross Currents in English Literature of the XVth Century” P-61-2 (1929)) のである。スベンサー
 の内面には、深い分裂があり純粹に感覚に耽ったり、自我の認識に到ることもなく、さりとて宗教改革に対する体
 験も確信もなく、あわただしく動揺して行く現世の中であって、「詩も宗教も一つの逃避場に他ならなかった」
 (P-62) とグリアスは考える。彼と同じ態度をとっている学者にルグイ Legouis がいる。私は、この見解
 には二つのあやまりがあると思う。その一つは、モラリストとしてのスベンサーの面を、ピューリタンとしての
 面と同一視し、スベンサーには感覚的なルネッサンスと、精神的な宗教改革が不完全な形で混在していると見て
 いる点である。この二つの範疇のみに限定し、それに全ての要素を押し込んで考える所に無理があり、もつと
 多角的に検討する必要があるのではないだろうか。二つのものにまとめることは、対立を明確にする効用があっ
 ても、それからはみ出すものが余りにも多すぎると言える。今一つのあやまりは、グリアスの観察態度が、あま
 りにも近代的な人間観、ないし人間観察方法をふりまわしすぎる点にあると思う。大体、ヒューマニズムという概
 念を一例にとっても、この言葉が現在使われているように、神を除外し、人間中心的な考え方、として用いられる
 ようになるのは十九世紀になってからであると N・E・D がわれわれに教えていることを見てもわかる。たしかに
 スベンサーは中世から近代への過渡的の人間であり、過渡期に特有な対立や相剋があったかもしれないが、それを
 強調することは果して妥当であろうか。そういえば今日でも、いや、現代はなおさらわれわれの中には対立と相剋
 がはてしなく行われている。文芸復興と宗教改革、肉と霊、本能と知性の対立は、人間が人間である限り、いつの
 世にも存在するものと言えないこともない。とにかく、分析的な現代人の目には、文芸復興と宗教改革、騎士道と
 キリスト教、多神教と一神教、という二つのものは、あくまでも両立できない概念である。しかし、この化学的抽

出物のような分析態度をもって、過渡的人間たるスペンサーを扱うことは、歴史と実存を輕視したものといえる。スペンサーには彼自身の體驗があつたはずであり、それはやはり、彼自身が生存した世界の実情にのつとつて、理解すべきである。

このような理解を求めて、近頃は「キリスト教的人文主義」Christian humanism とか「キリスト教的プラトニズム」Christian Platonism という矛盾した用語が、批評界に用いられ始めているが、このように、「冷たい湯」というような表現を用いねばならない理由があるわけで、その先弁をつけたのが、第二の立場に立つ C・S・ルイスだと云える。ダウデン Dowden やブッシュ Bush もこの立場に属すると言へる。まず、ルイスは、現代的尺度で分析するかわりに、中世的伝統から、その延長線上にスペンサーを置いて理解しようとする。もちろん、この立場にも、あやまりに陥る危険がある。すなわち、この立場を極端におしすすめると、文芸復興と宗教改革の二つの渦の中に置かれ、内的苦悩に満ちた人間像を把えることを、とかく忘れがちになり、平面的な人間觀察と伝統的な形式論理的考察に終るといふことが起きないとも限らない。しかし、私にはグリアスンやルグイの立場よりも、この観点に立つ方がスペンサーの理解に有用であると思う。とにかく、スペンサーは一つの要素で割り切れない複雑な多面性を持つこと、しかもそれが同一の、靈肉面をそなえた人間、歴史的過去と瞬間的現在に生きる人間の中において、いわば重層構造をなして存在していることを認めざるを得ない。それゆえ、スペンサーには、「妖精的ルネッサンス的、肉慾的、宮廷的、イタリヤ的、裝飾的」Elfin, Renaissance, voluptuous, courtly, Italianate, decorative, という形容句と共に、「英国的、新教的、粗野で、男らしく、教会役員の、家庭的、繁榮し、誠実な」English, Protestant, rustic, manly, churchwardenly, domestic, thrifty, honest という句をつけることは正しいといえる。(ルイス「愛のアレゴリー」一九三六年、三三〇頁)

また、スペンサーは、神話も信仰も事実も対立も矛盾も、すべて自由に受入れ、調和したのであり、いわば彼はルネッサンス的精神構造の持主であった。それゆえ、ダウデンは「詩人と教師としてのスペンサー」(一八八七年)で、スペンサーには中世主義も人文主義清教主義も、ともに存在し、調和していたと弁護している(二七六頁)。

また、ブッシュは「神話とルネッサンスの伝統」で、スペンサーの中には同時に二つの相反するものが共存していたし、また共存できたと、主張している(八八頁)。すなわち、「幻の騎士道をもの悲しげに讚美し」同時に「みにくい現実を大胆に風刺する。」「喜劇的哲学者」であり、また「牧歌的夢想家」、「教訓的道德家」である反面に「好色的異教徒」、「清教主義者」であり「旧教礼讀者」でもあり、「熱烈な恋人」かと思うと「神秘的なネオ・プラトニスト」でもあるというのである。

そこで、このように相対的、同時共存的説をとると、それらの多様なものの中、どれが本当のスペンサーを示すものか、と問うことは、無意味となる。たしかに、スペンサーの生きた時代には、生活の面でも、文学の世界でも、これらの全てが同時にあり得たことはたしかであるが、しかし、この多様なものが相互にどのような関係になっていたか、どのように矛盾しどのように調和していたか、どれが本質でどれが外形であったか、という難問は、十分解決されていない。そこで、この問題を扱う際、どうしても触れねばならないのはアレゴリーのことである。

六 スペンサーにおけるアレゴリー(寓話)

スペンサーの詩の一つの特色はそのアレゴリーにある。これはベン・ジョンソンやJ・R・ルウエル・ウィリアム・ハズリットを始め多くの人が非難し、攻撃した特色である。たとえばレイ・ハント Leigh Hunt は「想像力と空想」という論文の中で、スペンサーを鑑賞する際には「一〇パーセントを占めるアレゴリーを無視し、九〇パ

「セントの美と詩的な豊かさ (beauty and poetic luxury)」を買えばよい、と言っている。

しかし実は、このように非難されているアレゴリーにこそ、スペンサーを解明する鍵があるのであり、コールリヂはその「スペンサー講義」でそれを明言している。すなわち、「スペンサーを十分に鑑賞するためには、どうしてもアレゴリーの性格を考えてみなければならない」「No one can appreciate Spenser without some reflection on the nature of allegorical writing」のである。事実、ブッシュが先に挙げた著書の九六頁で指摘しているように、スペンサーの場合、単に装飾的な挿入と思われていた句、到る処にある神話、それらが全てアレゴリカルな取扱いを明白にうけていると言える。

アレゴリーは比喩の一形式であり、「擬人化」や「象徴」と密接に連関している。ふつうには、これらの三つは抽象的なものを、具体的なもので表現する表現形式であり、その両者の密度や意義によって、この三つの区別が生ずるのだと思う。アレゴリーは、ギリシャ神話に典型的に見られるが、しかし、それはなにもギリシャ的、異教的なもののみではない。キリスト教においても、「パンと葡萄酒」が、キリストの肉と血を象徴しているという思想をみてもわかるが、キリスト教的なものとも矛盾しないものである。言いかえれば、それはアレゴリーがあくまでも表現形式の問題であることによる。

ところで、このアレゴリーは本来、中世的なものである。中世において、人々はアレゴリカルにものを考え、生活し、また表現をなしたと言えるのではなからうか。すなわち、中世人の感覚は、事物そのものではなく、事物の表象や抽象を受けつけた、と考えることができる。その場合、個々の人間の体験は、それ自体としては意味がなくそれがあくまで体験一般としてのみ意義を持ったのであり、常に個ではなく普遍が存在したのである。それゆえ個人の恋愛感情や宗教感情は、中世においては、さまざまな象徴や教義に従ってのみ表現されたし、また受入れられ

た。そこでは、いわば個人的なものは、常に、普遍的なものに「すりかえられ」という操作が行われた。個人の体験も官能も感情も、たえず抽象され、普遍化され、いわばすべてが、「個体から普遍へ」の方向を示していた。従って、想像力よりも知性を、体験よりもドグマを信頼していた中世人の生活感情を、今日われわれが理解するためには、その内部に入らねばならない、というより、入るよう努力し、再構成をしなければならない。その時、はじめてアレゴリーは、安定した存在理由を与えられ、理解できるのである。この点から言ってもルイスの立場は妥当といえる。

スペンサーの場合は、ダンテの場合と同じようにアレゴリーが重大な役目を果していることは、これで明らかに思ったと思うが、問題は二つの中世的表現形式であるアレゴリーが、その表現内容と必らずしも調和し、一致しているとは言えない点にある。特に「フェアリー・クイーン」の複雑さと不安定さにそれがあてはまる。これはヒューマニズムやルネッサンスというものが、元来、内側の人間体験を尊重する思想であるがゆえに、ルネッサンス人スペンサーが、中世を背にして、顔を近代の方向に向けている限り、どうしても逆に「普遍から個体」という方向を示す時がある。これが「フェアリー・クイーン」に混乱としてあらわれているのである。しかし、それがやはり、グリアスンの言うほど、鋭く対立し、矛盾し、相剋したと見るのは疑問である。たとえば「フェアリー・クイーン」第一巻五節の二には、詩篇十九篇とギリシャ神話的太陽神とが矛盾なく混合し、ホーマーやバージルばりに表現されている。

At last the golden Oriental gate

ついに、大空の、東の黄金の扉が開き、

Of greatest heaven gan to open fair,

太陽神アポロは、花婿が花嫁の所に行くように、

And phoebus fresh, as bridegroom to his mate,

みずみずしく、露のしたたる髪をふりつつ舞り出て

Came dancing, shaking, his deawie haire ; 薄暗い大氣の中に、輝やく光をなげかける。

And hurld his glistring beames through gloomy aire.

しかも、ここには、何らの内的矛盾も外的障害もないといえる。これはほんの一例にすぎないが、これを思いあわせると、次のことが言えそうである。いろいろな主義や、文明や伝統や風潮がスペンサーという一つの大きな容器に入れられているが、それらは決して混沌とし、対立相剋しているのでもなさそうだと、言いかえれば、スペンサーという大詩人においては、この混沌は、想像力の作用により、対立的分子が克服され、異質的なものは融和され、包含されている、ではなからうか。要するに、スペンサーの場合は、中世的アレゴリイという表現形式の衣服をまといつてもルネッサンス的人間観が陰に陽に述べられているといえよう。

そこで、ルネッサンスと中世との間に断続があるというブルクハルト Burckhardt 的な考え方は修正された今日、ルネッサンス人スペンサーの世界は、有機的に中世からの連線上にあること、従って中世の伝統である「宮廷風恋愛」が強力に残存していると見ることは、十分妥当であるといえる。そこで結論へ急ごう。

七 結論——エロスからアガペーへの志向

スペンサーには、チョーサーのようなボエチウスばりの哲学や宮廷への讃歌はあらわれないで、逆に、たえまないローマ・カトリックの偽善性への攻撃（たとえば「フェアリー・クイーン」第一巻にはローマ法王や、教会や、僧侶への悪口で溢れている）や、エリザベス女王の宮廷に対する鋭い風刺がいたるところにあることに注目せざるを得ない。事実、「フェアリー・クイーン」全体を通して謳歌されているのは、まさに現実のイギリスとは正反対であるあの古代の祖国であり、伝説化された理想国である（第四卷八話三〇節参照）。

また、彼の詩には、宮廷や教会を含めるあらゆる人工的なものは悪であり、それは亡んでゆくこと、それと対照的に、自然 Nature と美 Beauty と知性 Sapience のような神の属性ともいふべき真実なものが、最後に勝利を得、永遠に残ってゆくことが描かれている。それは、ルイスもフッシュも指摘しているように、「二つの対照的イメヂャリによって表現されている。その一つは「光、健康、美、生命」light, health, beauty life であり、他の一つは「暗黒、病氣、醜惡、死」darkness, disease, ugliness death の世界である。この二つは見事に象徴化されているが、明らかに詩人は前者を高次のものとして扱っている、と言つてよい。さらにまた、あの「至福の四重」The Power of Bliss (F. Q. II. xii) に描かれている肉感的美と人間的地上的愛、エロスとアモールには、何かしら不自然な、腐敗臭が付きまとつていてという感じをぬぐいきれない。これは、あの有名な「アドウニス」の圖」(F. Q. III. vi) や「エビサラミオン」と比較すれば、さらにはつきりと印象づけられると思う。

とにかく、スペンサーが、中世的アレゴリイを借りて、同じくアレゴリカルな要素を持つカトリック教会を攻撃しているわけだが、その際、単に社会機構としての教会批判というよりは、むしろ、宗教改革の精神の反映がそこに見られると言つても言いすぎではあるまい。たしかにスペンサーには、エロスのなアモールがプラトニズムやヒューマニズムの影響で特殊な形をとつてあらわれているのであるが、それと同時に、もつと内面的な、単なる人間肯定以上の、プロテスタンティズムあるいはピューリタニズムがあるのではなからうか。W・L・レニック Rynick は、これを清教主義の一つの形態と考え、説明している。

『虚偽の清教主義の特色は「否定」にある。しかし真の清教徒は……禁欲主義者でなく……善悪の永遠の抗争に参加する戦士である。彼の勝利も敗北も、宇宙全体に影響する。そして彼は決して単独に戦つてゐるのではない』(レニック著「エドマンド・スペンサー」一九二五年、一六八頁) これはいわば男性的、積極的清教主義ともいえ

るし、オルダス・ハックスレイが口をきわめて攻撃した禁欲的退嬰的清教主義とは正反対のものである。

いずれにしても、スペンサーの中には、ヒューマニズムもビュリタニズムも、異教も中世も近代も、すべて共存する。それはあたかも一本の太木のようなものである。その太木の根は地獄まで下って、醜い混沌と偽善と虚偽を描き、他方、その技は天までのびて、天使の声と天上の愛を説いている。ブッシュが指摘しているように (English Poetry P-43) 'スペンサーはそのような多面性を持つてはいるが、あくまでも宗教改革の線を維持しておりたとえば「天上の美の讃歌」 An Hymn in Honour of Heavenly Beattie において神があらゆる段階の美の諸相の上に置かれていることをはっきり認識すべきであろう。スペンサーのエロスやアモールやフィリアは、アガペーと共存しつつ、やがてはアガペーによって止揚され、浄化される方向、言いかえれば、文芸復興より宗教改革への方向を指していること、そしてスペンサーの多様性がその線に沿って眺める時、漠然とはしていても一定の秩序と調和を目指しているといえるのではなからうか。

もちろん、それは常に意識的に志向されているとは限らないし、過渡的様相の下に他のものと混在していることも否定できない。たしかにスペンサーには、自分の政敵や競争者に対する激しい敵意や党派根性のような人間的欠点や、非音楽的で退屈な教訓も少くない。しかし、スペンサーの持つあらゆる欠点と、時代的人間的限界をはつきり認識した上で、彼に無いものではなく、彼が本来持つているものを求める時、われわれは改めて「英詩の父」 Father of English Poetry を再発見するであらう。そして、彼の人間観、「愛」の理念の根底に、うつろい易い人生の中にあつて、あまりにも苦難を味わった一人の心貧しき人間が、自からの永遠の休息を、創造主である唯一の神に切に祈り求めている姿を、改めて知るにいたるであらう。「アガペー」こそ、彼の詩と彼の生涯の根本的な支柱であり、究極の目標であつた。これはもつと純粋な形で、ミルトンやバンヤンに受けつがれてゆく。

また、強烈な個性の持主たるジョン・ダンにも連なるものである。

“Then gin I thinke on that which Nature sayd,
Of that same time when no more Change shall be,
But stedfast of all things firmly stayd
Upon the pillours of Eternity,
For, all that moueth, doth in Change delight:
But thence-forth all shall rest eternally
With Him that is the God of Sabbath high:
Othat great Sabbath God, graunt me that
Sabbaoths sight.”

(Mutabilitie Canto, the closing lines)

やがてわたしは「自然」が言った言葉について考えた。いつかはついに、一切の変化が終り、すべてのものはしっかりと、「永遠」の支柱の上に不動の安住を得る時が来るであらう。

流転するものはすべて、変化を喜ぶが、その時以後は、安息やすみの神である天の神と共に、永遠に安息を得るにいたるであらう。

ああ、偉大な安息の神よ、わたしにその安息の姿をお示し下さい。

(一九五九・六・一記)